

経済マンスリー

[原油]

原油市場を取り巻く環境（1月）

1. 原油価格の推移

原油価格(WTI 期近物 1 バレル当たり)は、欧米での新型コロナウイルスのワクチン接種開始や米国の追加経済対策期待等を受け昨年 12 月半ばより上昇し、年末には 48 ドル台にまで達した。その後、1月4日から5日にかけて開催された OPEC プラス閣僚級会合では、ロシアとカザフスタンのみが協調減産量を小幅縮小し、全体としては日量 7.5 万バレルの増産となることが決定されたが、会合後にサウジアラビアが2月から3月にかけて同 100 万バレルの自主的な追加減産を実施すると発表したことで、需給改善期待が台頭、価格は更に上昇した。足元は 50 ドル台前半で推移しており、50 ドル台が定着しつつある(第 1 図・上)。

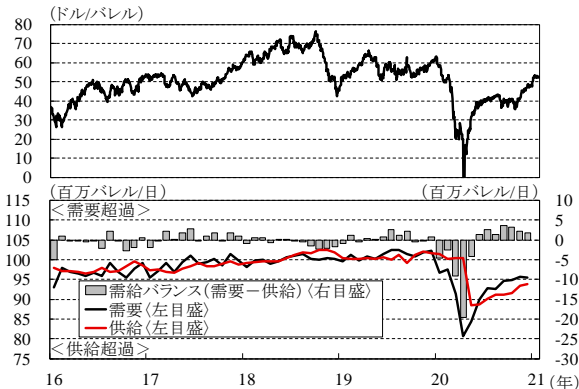
2. 需給の動向

今月公表された EIA 月報によると、昨年 12 月の世界の原油需要量は日量 9,555 万バレル、供給量は同 9,382 万バレルと、7 ヶ月連続で需要超過となった。但し、OPEC プラスの協調減産にも関わらず供給量が需要量に近付いている点は注意が必要だ(第 1 図・下)。

特に米国シェールオイルが今後増産される可能性には注意を要する。一般的に米国シェール企業による新規油井の採算確保ラインは約 50 ドルと言われるが、米国石油リグ稼働数は、50 ドル台に回復する前の昨年 10 月より、年末の需要持ち直しや価格回復を先取りした形で増加傾向にある(第 2 図・上)。また、仕上げをすれば産油可能な DUC^(注)が足元減少していることも、仕上げ進捗によりシェールオイル生産が持ち直す兆しとして捉えられる(第 2 図・下)。この先、シェールオイル生産が持ち直しに転じ、更には増産ペースが加速することになれば、原油の需給バランスの悪化は避けられまい。OPEC プラスが協調減産を再拡大することで首尾よく供給調整がなされればよいが、異議を唱える国が出てくることは容易に想像される。このところ比較的速いペースで上昇が続いてきた原油価格だが、下押し圧力が高まる展開にも注意が必要となってくるだろう。

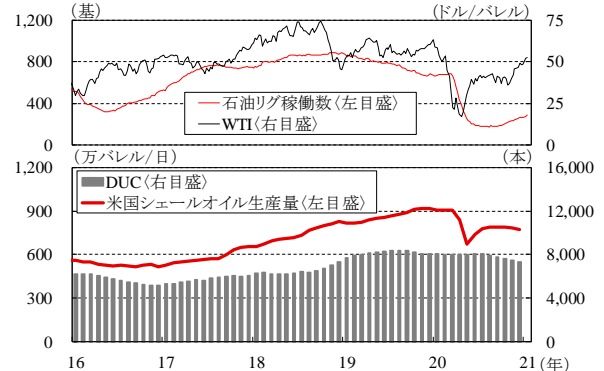
(注) Drilled but Uncompleted。坑井の掘削は完了しているが、水圧破碎等の仕上げを行っていない未完成の油井。

第1図：原油価格及び世界の需給バランスの推移



(資料) EIA(米エネルギー省エネルギー情報局)資料、Bloombergより
三菱UFJ銀行経済調査室作成

第2図：米国石油リグ稼働数と原油価格、及び米国シェールオイル生産量とDUCの数の推移



(資料) Baker Hughes資料、Bloomberg、EIA資料より三菱UFJ銀行
経済調査室作成

照会先：三菱 UFJ 銀行 経済調査室 布施 直樹 naoki_fuse@mufg.jp
鷹巣 里奈 rina_takasu@mufg.jp

当資料は情報提供のみを目的として作成されたものであり、金融商品の販売や投資など何らかの行動を勧誘するものではありません。ご利用に関しては、すべてお客様御自身でご判断下さいますよう、宜しくお願い申し上げます。当資料は信頼できると思われる情報に基づいて作成されていますが、当室はその正確性を保証するものではありません。内容は予告なしに変更することがありますので、予めご了承下さい。また、当資料は著作物であり、著作権法により保護されております。全文または一部を転載する場合は出所を明記してください。また、当資料全文は、弊社ホームページでもご覧いただけます。